第４１回日本のうたごえ全国協議会総会

方針

はじめに

〝憲法九条を生かし、いのち輝く地球（くに）を〟を合い言葉に、全国各地で、今を生きる人たちにうたごえをとどけ、つないできたこの１年。

とりわけ、０７年は九条をまもる平和のうたごえ行動「ＳＩＮＧＩＮＧ　ＰＥＡＣＥ　９９９」（以下、〝Ｓ．Ｐ．９９９〟）を中心に、歌をつくり・うたい・ひろげる創造豊かな活動を展開し、サークル・合唱団の演奏会、合唱発表会、地方、産業別のうたごえ祭典、そして、２００７年日本のうたごえ祭典 in 奈良（以下、０７年祭典 in 奈良）に実らせた。

０７年祭典 in 奈良は、祭典テーマ〝ともに生き、ともにうたおう　はるかなときをつむいで〟にふさわしく、平和と共生の未来を拓く憲法の心を熱く歌い交わした。「元気が出た」「生きている証を実感した」「ともに生きる喜びで涙があふれた」等の声が寄せられ、「大きな感動と人の輪の財産を残して祭典を成功させることが出来た」（上殿運営委員長）と言われる到達を示した。

祭典を成功させる土台と位置づけたうたごえ新聞の読者拡大も精力的にとりくまれ、開催地の、うたごえに初めて接する多くの人々にうたごえ運動とうたごえ祭典を伝え、祭典につなぐ大きな力となった。その教訓は運動創立６０周年記念２００８年日本のうたごえ祭典を開催する東京に引き継がれ、「全国のうたごえの連帯で６０周年に最高時読者達成」への大きな確信となった。

こうしたうたごえのひろがり・つながりを、うたごえ協議会に結び、交流・連帯する活動をさらに発展させていきたい。

うたごえ６０周年を迎えた今総会は、こうした活動の成果をふまえ、２００４年全国総会で決めた「うたごえ６０周年に向かう５カ年計画」を総達成し、次への大きな一歩を踏み出す０８年方針提案を深めあい、確認して進めていく場としたい。

私たちをとりまく社会の動き

１年を一文字であらわす漢字が「偽」となった２００７年。国民を欺き私腹を肥やす姿が企業家、政治家を問わず連日ニュースで報道され、国民の怒りを買う一方で、国民の「真」の声で政治を動かすことが実感できる１年ともなった。

参議院選挙での与党の大敗北の後、「改憲」を旗頭に登場した安倍総理の退陣と「靖国派」の後退、沖縄戦の教科書検定問題、年金不払い問題や薬害訴訟、原爆症認定訴訟、過労死裁判などで圧倒的な世論の前に政府が一定の譲歩をせざるを得ない状況をつくり出してきたことに確信を持ちたい。

規制緩和と民営化を柱とする「構造改革」と、多国籍企業中心の経済の「グローバル化」こそが「活力と魅力ある日本」に必要だとした「新自由主義」の行き着くところが、さらなる格差の拡大であり、社会福祉の切り捨てであり、さらには地球環境が人類の生存を脅かす状態になっても、とどまることを知らない飽くなき利潤の追求であることが明らかになってきた。

憲法改悪のねらいが、グローバル化した大企業の権益を守るためにアメリカと一緒に世界のどこへでも出かけていき戦争ができるようにすること、一方で「国家の利益」のためには個人の権利を制限できるように

することだということをしっかりと見ていきたい。

アメリカを中心とするこの新自由主義路線は、地球規模の平和と安全を望む世界各国との矛盾を激化し、孤立を深める結果となっている。イラク戦争推進勢力や地球温暖化防止に消極的な勢力は支持を得られない状況が、世界でもアメリカ国内でもおこっている。中南米の国々でアメリカの新自由主義政策に組みしない流れはいっそう拡大している。

日本でも、国民各層との矛盾は大きくなっている。働いても働いても生活できないワーキングプアの増大、生活保護を受けられず「おにぎりが食べたい」と書き残した孤独死、家族のため会社のためと働きつづけたあげくの過労死、軍事費と大企業優遇を聖域にした上で、高齢者や障害者をはじめとする庶民に負担増を強いる福祉切り捨て、働く者の誇りと希望を打ち砕く「リストラ」が横行している。続発する企業と官僚、政治家の腐敗と汚職、世論を無視して「新テロ特措法」を強引に成立させるような行為に対し、国民の憤りが渦巻いている。

「規制緩和」「民営化」路線は、文化活動にも影を落としている。文化施設の使用料値上げ、使用時間、使用条件の規制、「売れるもの」中心の企画の横行は、草の根の文化活動の条件を狭めている。企画の内容にまで口を出し、「政治的」の理由で貸し出しを渋る施設まで生まれている。労働条件の悪化、低所得者層の増大は時間的にも経済的にも国民の文化を享受する権利を圧迫している。

そんな中で多くの人々が声を上げ立ち上がっている。

「九条を守る」一点で共同する「九条の会」は地域・階層・職場・学園にひろがり、その数は７０００になろうとしている。トヨタ過労死裁判では、ＱＣサークル活動などについても業務だと認めて、過労死と判断した判決が確定し、原告内野博子さんが勝利した。「お金の額ではない、企業と政府の責任をはっきりさせ、被害者全員の救済を」と一歩も引かずにたたかった薬害訴訟原告の「人間の尊厳を守るたたかい」は多くの人々の共感を呼び、勝利和解を勝ち取った。一人のたたかいを自分のたたかいとして支え合い大きな成果を上げている「青年ユニオン」が生き生きと活動をしている。集団自決に軍の命令があったとする教科書を書き変えさせようとする国の検定に対し、１１万人を越える大集会を成功させた沖縄県民のたたかいは国を追い詰めている。

「貧困と格差社会」を正面から取り上げ、告発するドキュメンタリー番組がつくられ、戦争や核兵器、権力の横暴がもたらす悲劇を庶民の側から描いた映画やテレビドラマ、音楽が高い評価を受け、それらに携わった芸能人が積極的に発言する状況も生まれている。

「ゆたかな地球で、人間らしく生き続けたい」という人類共通の願いは、それを阻むものに対して、人種や宗教、思想信条、所属する団体や企業の枠を越えて連帯し、大きな世論で立ち向かう状況をつくっている。

「無関心」と「あきらめ」を克服し、人々をつなぎ、勇気と希望をあたえる文化の役割はますます大切になっている。

６０周年を迎えたうたごえ運動が「平和の力」「生きる力」のうたごえを「たたかいとともに」さらに意気高くすすめることが求められている。

２００７年度　活動のまとめ

方針〈１〉人々のねがいと結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、「みんなうたう会」を旺盛に展開し、〝共に生きる町づくり・地域づくり〟のうたごえを広げる。

〔演奏・普及活動〕

０７年は、「〝いつでもどこでもうたごえを〟を合言葉に多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びをひろげる」ことを掲げ、〝Ｓ．Ｐ．９９〟運動を、すべての合唱発表会参加団体がとりくむこと、「うたごえ九条の会」「音楽・九条の会」をつくり拡げ、「九条の会」との連携を深めた活動の展開、旺盛な普及演奏活動と全市区町村での〝みんなうたう会〟開催、人間らしく生き、働くために地域・職場からのうたごえを起

こすことをめざした。

〈〝ＳＩＮＧＩＮＧ　ＰＥＡＣＥ　９９９〟運動の展開〉

０６年に提唱した、憲法を語り、うたい交わす「九条をまもる平和うたう会」運動を起こすことを、九条と九九条にちなみ〝ＳＩＮＧＩＮＧ　ＰＥＡＣＥ　９９９〟とネーミングしたとりくみをひきつづき発展させた。

５月３日憲法記念日に向けた「５・３・９」（ＧＯ！サンキュー）、８月の原水爆禁止世界大会に向けた「８・６・９」（ハローナイン）、０７年祭典 in 奈良に向けた「うたがきキャンペーン」と連続して、うたごえ新聞読者拡大と、演奏普及活動、歌集「うた・うた・うた」の普及を統一して取り組み、大きな成果を上げている。

地域・分野の九条の会との共同、うたごえ独自での定期的に街頭で歌って宣伝する活動や、「９条を語るうたごえ喫茶」を連続して取り組んでいる活動（千葉、東京、奈良、大阪、広島など）は、新鮮な出会いや感動を生み、新たなエネルギーを得る場にもなっている。

九条関連の講演会、集会、映画会などでの演奏普及活動は、全国各地で展開され、取り組みの成功に大きく貢献している。

九条を守る一点での共同は全国にひろがり、幅広い音楽家や音楽愛好家がこの取り組みに参加できる状況をつくってきた。〝９条をうたおうスプリングフェスタ〟（大阪）、〝平和を願う文化のつどい〟（北海道・室蘭）、〝講演とコンサート〟（香川）、〝平和コンサート〟（佐賀）、〝憲法ミュージカル〟（東京・三多摩、千葉、広島など）、〝ピースナインコンサート〟（各地）などが取り組まれている。さらに、毎年取り組まれている「平和音楽祭」（山形、栃木、長野、愛知、大阪、広島、高知など）でも、プロデュースや演奏で成功に大きく貢献しながら、ここでも意識的に〝九条〟を取り上げている。また、これらのとりくみを契機に「９条の会合唱団ハーモニー」（栃木）、「ピース合唱団」（茨城）、「９条合唱団」（山梨）など〝市民合唱団〟を組織して歌い手をひろげているのも特徴である。

サークル・合唱団の演奏会も、憲法を柱に据えたものが数多く開催された。定期的に開催されているうたう会・うたごえ喫茶・うたごえ酒場もそのときどきに九条や憲法をテーマにかかげてひろがっている。

京都は全市区町村での〝Ｓ．Ｐ．９９９〟を意識的に展開、うたごえ協議会のニュースでどこまでひろがったかを伝えながら取り組んでいる。

新潟では県の音楽九条の会発足コンサートが開かれ、うたごえも全県から〝合唱団ピース９〟に参加、成功に寄与している。二本松はじめさんらがすすめている〝つながりあそび・うた〟のなかに〝つながり九条の会〟も発足している。

「うたごえ九条の会」「音楽・九条の会」は各地で活動を繰り広げているが、さらに意識的な取り組みが求められている。

「音楽・九条の会」は、大阪で結成１周年のコンサートを鞍馬寺設樂貫首の講演と合わせて開催。東京では連続コンサートの３回目ギタリスト鈴木大介、４回目普天間かおり、５回目上條恒彦・高石ともや・笠木透「達人たちの歌」として開催、いずれも出演者、観客に強い感動をあたえている。

「ねがい」（たかだりゅうじ曲）はさらに広がりをみせ、全国的な集会をはじめ様々なつどいで歌われている。千葉ではユネスコチャリティコンサートで合唱連盟が呼びかけ合同演奏を実現した。５番の詞をつくる取り組みは、自らの想いを表現できる機会としてさらに広がりを見せ１００番を超えている。特に、教育現場でのとりくみに注目したい。

〈核兵器廃絶・基地強化反対のとりくみとうたごえ〉

焼津での３・１ビキニデー、広島・長崎での原水爆禁止世界大会で、今年も平和のうたごえが高らかに響いたのをはじめ、全国で被爆者慰霊祭、原爆症認定訴訟、平和行進などの取り組みに、積極的にうたごえを持って参加し、大きな力を発揮した。特に国民平和大行進を、「すべての市区町村でうたごえを」の方針と結びつけ、うたごえ新聞でも連続して

大きく取り上げた。「うたごえがあって歩き通せた」「元気をもらった」「注目度がちがう」など、参加者から喜ばれ、参加したうたごえのメンバーの確信にもつながっている。協議会として全県を視野に入れ、実行委員会と共同して取り組んでいる愛知、千葉の経験に学びたい。

山形では、合併後の鶴岡市で非核都市宣言を再びやろうという取り組みに、山形市の平和コンサートの経験を伝えるなどの経験も生まれた。

核兵器のない世界の実現は人類共通の願いであり、この取り組みには幅広い国民、特に青年層が積極的にかかわっている。うたごえとしても、さらに大きくとりくみをひろげていく必要がある。

基地拡大強化に反対する岩国、座間の大集会をはじめ、矢臼別などでうたごえが響いている。

〈生きる力のうたごえ〉

「人間の歌」（山ノ木竹志詞・曲）が、働く人々をはじめとする幅広い層に、大きな共感を持ってひろがっている。Ｄ５１合唱団（宮城・国鉄）の学校公演で、この歌を聴いた父母たちが自ら合唱を実現したというエピソードは、この歌の持っている普遍的な力を感じることができる。

財政再建団体となり市民の暮らしにも大きな影響が出ている夕張市、再生に向かう市民を励ます創作曲が生まれ、市民のつどいでうたごえが響いた。トヨタ過労死裁判ではトヨタ車体労働者うたう会を先頭に愛知のうたごえは数々の創作曲をつくり共にたたかい、画期的な勝利判決を勝ち取る大きな力となった。初芝学園争議や貝塚養護学校存続のたたかいで街頭宣伝、裁判傍聴、支援集会にうたごえを持って参加する合唱団Ｐｅａｃｅ　Ｃａｌｌを初めとする大阪のうたごえ、不当解雇や雇い止め、男女賃金差別、偽装請負など不当労働行為に抗してたたかう争議支援のうたごえは、宮城、群馬、東京、大阪、兵庫、福岡などで奮闘し、その闘いの勝利や前進に大きな力を発揮している。

保育のうたごえは、保育士、園児、保護者、地域を巻き込んだとりくみをすすめ、民営化攻撃や子育て支援後退に対してたたかっている。東京では０６年の保育のうたごえ全国祭典でつくられた合唱構成を元に演奏活動がひろがっている。

薬害訴訟（大阪）、原爆症認定訴訟（愛知）、青空裁判（東京・足立）、君が代裁判（東京）などでも創作曲をつくり、たたかいを励ましている。

関西合唱団の、大阪民医連と共同して医療をテーマにした創作曲を現場に足を運びながらつくり、定期演奏会で発表した取り組みにも注目したい。

介護の現場、医療現場、作業所など福祉関係でのうたごえ普及はさらに活発になっている。０７祭典＝奈良でも、「障害者自立支援法」を背景にした創作曲「今日も元気に」が歌われた。

「ぞうれっしゃがやってきた」「合唱劇カネト」の公演も各地で開催され、世代をつなぎ、地域を結ぶ取り組みとして成果を上げている。

学生のうたごえＯＢや高齢者のうたごえが活気を見せているのも特徴である。

生きることそのものがたたかいという状況の中で、生きる力のうたごえが今こそ求められている。一つひとつのたたかいの共通の根っこが幅広い連帯を生みだす要素にもなっている。たたかいに深く根ざしながら、広い視野を持って人々を結ぶ文化がますます大切になっている。

〈盛況なうたう会、うたごえ喫茶・うたごえ酒場〉

みんなと力一杯歌いたい、歌うことで元気になりたい、という要求は渦巻いている。恒常的に開催されているうたごえ喫茶も増え、参加者が会場に入りきれないといううれしい悲鳴も聞こえている。年金者運動、母親運動、女性運動、患者会、障害者運動などなどさまざまな分野と共同してのうたう会・うたごえ喫茶が全国で繰り広げられている。

首都圏青年ユニオンや公務公共一般労組と共同して開催している東京・大塚のうたごえ酒場は２０回を記念して、たたかうナショナルセンター全労連会館でうたごえ酒場を実現、百数十人の参加で成功させた。０

５年日本のうたごえ祭典 in ひろしま開催後、歌う要求が吹き出している広島では、県内各地にうたう会、うたごえ喫茶がひろがり、サークル化も進んでいる。

各地のアコーディオンサークルにも伴奏の依頼が増え、活動の場を広げている。東京・三多摩では地域のうたごえ喫茶のネットワークも生まれ、共同のうたごえ喫茶を開催した。うたごえ新聞新企画「うたキタス」は、各地のうたごえ喫茶の取り組みを交流し学び合う上で好評である。

要求に応えるシングアウトリーダー、伴奏者を大量に生みだすことはますます大切になっている。新版歌集「うた・うた・うた」とカラオケＣＤを有効に生かす取り組みや、「うたう会リーダー講習会」をひろげる必要がある。

様々な集会やメーデーなどで、マンネリを打ち破り、参加者が心をひとつに元気の出る文化的な要素が求められている。うたごえが演奏集団としてだけではなく、企画・制作・演出・進行などのプロデュース集団として力量を高めることが大切になっている。

〔創作活動〕

◆多くの人が〝こぞってうたえる〟愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

〝血眼になって探したカルテ／たった５グラムの薬によって／人生を狂わされ　生きがいを奪われた…。（薬害肝炎訴訟『私はあきらめない』桑田智子作詞、豊田光雄作曲）

０６年に原告の桑田智子さんの詩によってつくられたこの歌は、大きな話題となった薬害肝炎訴訟のたたかいを励まし、広げていく力となった。そして、「おやすみ」「背すじのばして」（入江文子作詞、林学作曲）はトヨタ過労死裁判勝利にむけて多くの支援の人々の心をつないだ。どちらも、人としてやむにやまれず立ち上がる、その思いに応えて創られたものだ。

国民の中には今のあまりにも納得できない状況への不満や怒りが渦巻いている。そんな中でここ数年、全国の創作運動は確実に前進してきた。憲法や平和、教育などをテーマにしながらも、「『こんな歌を求めていた！』という生活感・リアリティのある作品が増えてきた」は、日本のうたごえ祭典「オリジナルコンサート」（以下、オリコン）講評委員会での一致したところだ（詳細はうたごえ新聞オリコン総評参照）。

そして、こうした運動をつくってきた、各サークルや個人、そしてブロックや県でのうたごえの組織的継続的な努力に注目したい。

０７年全国創作合宿開催地として、その成功に大きな役割を果たし、その成果をもってオリコンへの組織的な参加をした千葉、運動創立６０周年記念祭典をめざし、「オリコン」開催を継続し、様々な歌作りがすすめられている東京。１９７７年から毎年創作発表会と創作曲集製作を継続してきた愛知。京都うたごえ協議会の〝うた畑〟の活動も創作を継続していく上での一つの経験である。

大阪民医連とともに「いのちをつなぐ人たちのうた」（上田假奈代作詞、安広真理作曲）を生み出した関西合唱団。大阪創作センターをつくり、府下の多くの創り手に光を当てる取り組みをすすめている大阪。毎年創作合宿を行う岡山、福島、はじめて創作合宿に取り組んだ広島、年２回もの創作合宿を実行する九州、また青年や産別における創作もふくめ、旺盛な創作活動が各地で展開された。そして全国の運動をつなぎ、励まし、学びあうひとつの起点となっているのが毎年開催してきた全国創作合宿である。０７年は毎年好評の詩人石黒真知子さんに加え、作・編曲家井上鑑さんのアレンジ講座も新鮮な刺激を与えてくれた。

また、０７年は日本のうたごえ６０周年創作プロジェクトで、祭典運動をリードする創作曲を生み出そうと、創作合宿でのシンポジウムに始まり、全国に呼びかけすすめてきた。〈働くものの歌〉では、貧困と格差に立ち向かう青年たちの歌を、と首都圏青年ユニオンとともに創作曲第１号「ありがとう」（Ｋａｚｕｍｉ作詞、小島啓介作曲、山ノ木竹志補作）

が大塚のうたごえ酒場で披露された。このほか、日の丸・君が代の強制など教育現場から、米軍基地とのたたかいから、障害者運動から、それぞれ新しい歌作りをすすめてきた。しかしまだ、形になるところまで進んでいない。

今後も、様々なたたかいとむすびながら、時代を切りひらき、共感を呼ぶ歌づくりを進めていくことが求められている。

専門家との協力共同による作品づくりでは、６０周年記念事業（～うたは歴史（とき）を刻む～うたごえと日本の作曲家たちコンサート）として神戸市役所センター合唱団が新実徳英氏に委嘱した、混声合唱と児童合唱のための「戦争で死んだ兵士のこと～これは戦争の話ではありません」をはじめ各地で取り組まれた。

方針（２）地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い創造の前進をめざす合唱発表会にする。

〔合唱発表会運動〕

全国の合唱発表会・交流会は２９都道府県、１ブロック、９産業別、１階層で開催、１１８０を越す参加団体となっている。あらたに地域の合唱交流会も開催（福岡）し、参加層をひろげたところも生まれた。

協議会加盟団体の枠を越え大きくひろがっているところでは、自分たちの思いを発表したい、他の団体から学びたいという要求を大切に、日常の取り組みで結びついた幅広い音楽愛好家にも呼びかけられている。地域の音楽団体のネットワークづくりも視野に入れ、実行委員会、懇談会などを丁寧にすすめ、ネーミングも考え、気軽に参加し、交流できる工夫をしている。

全国合唱発表会（オリコン含む）は、７部門２４６団体、のべ５０００人を越える参加で開催された。この間アンケートなどを元に改善を重ねてきた結果、聴き合うマナーも一定前進、インターネットの活用などで申し込み実務などでも改善が図られている。一般の部Ｂ（２６人以上）部門への参加団体が増えているのも特徴。会場間の移動、スタッフ不足で若干支障をきたした運営面、日程設定などでさらなる改善が求められている。「うたごえ運動における合唱発表会のあり方」の論議を深めながら、各部門の意義付けなどを今一度確認していく必要がある。

方針（３）地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

〔２００７年日本のうたごえ祭典 in 奈良〕

祭典は〝ともに生き、ともにうたおう　はるかなときをつむいで〟のテーマで奈良で開かれた。１つのコンサート、大音楽会、６部門の合唱発表会とオリコンに地元、全国からのべ１２０００人が参加し、満員の参加者で成功させた。

古都ならではのプログラム～真言律宗の声明「散華三段」、南都楽所「蘭陵王」にソロ、マリンバ、合唱で魅了した歓迎音楽会〈はるかなときをつむいで〉。絢爛かつ勇壮な動きに会場が沸いた中国・南京理工大学の「龍の踊り」はじめ国際色ゆたかな多彩なゲストで構成された第一部〝時をこえ、国をこえて〟、子どもと大人による合唱「ボクたちのさがしもの」をメインに構成した第２部〝いのち輝いて〟、各階層、全国合同による第３部の〝響きあう心〟の構成で、それぞれの想い・ねがいを歌いかわした大音楽会〈ともに生き、ともにうたおう〉。初めての開催であったが、「みんなでうたうこと、うたいかわすことの意味、大切さ、感動をあらためて感じさせてくれた」〈大うたがき〉。　今を生きる私たちの視点から、「アジア」、「暮らし」、「憲法」を結び、平和と共生　の未来を開く憲法の心を熱く歌いあげた。

成功の要因は、祭典開催決定にいたるまでの1年半に及ぶ協議会・各サークルでの討議と学習を深めたことが、一人ひとりが祭典を取り組む力を強め、みんなで準備し、つくりあげる祭典となったこと。そのことが賛同募金、うたごえ新聞読者拡大の超過達成と、歌って普及の旺盛な展開と結び取り組まれたこと。また、各ステージの歌づくりと練習の積み上げが、〝一人ひとりが広げ手〟として演奏の確信となり、本番12日前に札止めという広がりをつくり、当日の演奏に実らせたこと。そして、1年前に祭典プレ企画として26年ぶりに開かれた奈良のうたごえ祭典成功の確信などがあげられる。

〔地方祭典・産業別祭典〕

〈地方祭典〉

30数年ぶりに開催された東京・南部うたごえ祭典は、日常活動の中での結びつきを反映し、地域の九条の会や、女性運動、若者の職場の実態を描く構成など、ステージ、ロビーを含めた共同した取り組みとなり、あらためて「地域祭典」の持つ意義を確認させるものとなった。

毎年持ち回りで開催している北海道祭典（十勝）、九州祭典（長崎）は、共に開催地の特長を生かし、ブロックの連帯を強め、講習会の開催や日本のうたごえ祭典の取り組みなどにも大きな力となっている。九州は「第九」を企画の柱に据え、多くの専門家、音楽愛好家との共同の広がりの中で大きく成功させた。

広島、長野、山形、東京・足立、北海道・道南などは連続して取り組んでいる。

〈産業別祭典〉

国鉄祭典は神奈川のうたごえ祭典とジョイントで開催。職場のたたかいに根ざしたうたごえと地域で花開くうたごえが協調しあい、互いに学びあえる祭典となった。

電通祭典は、開催地東京・三多摩の地域に目を向け、憲法ミュージカル、朝鮮学校などのゲスト出演、高平つぐゆき作品を歌う企画など多彩なプログラムで成功している。

保育祭典は、民営化に反対するたたかいを反映し、開催地広島では園をあげての参加もあり、県協議会の全面協力の下成功した。

教育基本法が改悪される中で開かれた教育祭典は、神奈川・小田原の合唱団たんぽぽを中心に、こども、若者、親と、教師が一体となってステージをつくった。

医療祭典は、「来てもらう」から「足を運ぶ」とりくみを実現、開催地千葉の3つの医療施設で全国の合唱団が分かれてミニコンサートを開催、喜ばれている

郵便祭典（京都）は合唱交流を中心に開催。私鉄祭典（大阪）、港湾祭典（東京）もそれぞれ参加サークルが少なくなる中でも継続して開催されている。自治体はうたごえ交流会として開催した。

現役労働者の会員が少なくなり、厳しい労働条件、非正規労働者が増えている中で、職場のうたごえが今後どのような運動を展開していくか、真剣な論議が求められている。

〝全国青年のうたごえ音楽祭 in きょうと「響感。」〟は京都で開催。和太鼓、郷土芸能で全体をつなぎながら、京都うたごえ協議会のバックアップもあり、新しい出会いをつくりながらの祭典となり、07祭典 in 奈良・青年の舞台成功へとつなげた。

方針〈4〉歌の広がりをうたごえ新聞読者につなぎ、豊かな〝うたごえ発ジャーナル〟を確立する

〔うたごえ新聞・季刊『日本のうたごえ』〕

〈うたごえ新聞〉

編集では、07年度運動の柱〝S．P．999〟とリンクし、「憲法が生きる社会と文化」を基調に進めた。前年度にひき続き、実践交流「ＬＯＶＥ９」の通年特集。その実践のヒントになる識者の提言（『憲法のカナリア９条と２５条』・二宮厚美神戸大学教授、『力によらない平和観、個の国家観』・浅井基文広島市立大学平和研究所所長、『世界の平和をつくり出す鍵・九条』・川崎哲９条世界会議事務局長）などを特集。

07年度は新企画も多数立てた。ルポ「格差社会と文化」は、保育園の民営化問題、医療・介護（通信、大阪）、夕張などを取り上げた。これらの問題も底流にある憲法が浮き出された。連載「ふるさとの芸能、ふるさとの心」（三浦恒夫・舞踊家・演出家）、「作詞アドバイス」（石黒真知子・詩人）は、いずれも郷土芸能関係の投稿が増え、詞に対する関心も高めている。また、各地のうたごえ喫茶の広がりから企画した「うたキタス」（斉藤一正）は、通信編を特集するなど投稿が増えている。

歌「ねがい」の広がりから、〝ねがいコネクション〟のケニア・ゴードン・ニャバデさんのインタビュー登場はじめ、「ねがい」の特集も07年度の特徴。

「読み・作り（通信・企画提案）・広げる（読者拡大）」うたごえ新聞。時代を見る、そこに生きる人々の声をつなぐ視点から、各地の実践交流とともに、「映画は世界を変えられる」「音楽は生きる力」と語るシネカノン代表李鳳宇さんはじめインタビューなど「読み」はさらに深めたい。

「作り」では、各地から国内外での活動が通信された。そのなかで、国鉄・郡山うたう会の佐藤敏さんの「物言わぬ仲間こそ宝の山」と創作曲「この人生を君と」の通信は、仲間を思う心と歌が豊かに届けられた。全国の活動を英知にするために通信活動をさらに強めたい。同時に、活動を生き生きと届けるための内容〝伝え方〟も合わせて強化していく必要がある。

「読み、作り、広げる」が総合的に取り組まれた奈良のうたごえの活動は教訓としたい。祭典とうたごえ新聞を〝運動を伝え・広げるもの〟として結び、企画提案、送稿、読者拡大が大きく展開された。「読み・作り・広げる」活動を深める場として開催するうた新フォーラムやうた新まつりも、奈良では一人の読者も大きな力とよびかけて開かれ、祭典成功への力となった。

〝うた新フォーラム〟〝うた新まつり〟は、他に埼玉、千葉、東京、愛知、京都で開催された。奈良の教訓を全国化するために全国で開催していく必要がある。

〈季刊「日本のうたごえ」〉

「運動の豊かな創造」を基調に、運動内外からの論文、講演等を特集。「運動創立６０周年へ」（田中嘉治）、「趣味人と人生―文化をわれらに」（木津川計）、「あした何うたう？　ぼくらがうたうということ」（山本忠生）等を特集。また、日本のうたごえ祭典運動から学ぶものとして、06年ふくい・北陸の教訓、準備がすすむ07年奈良の取り組みを特集。特に№１３７での「日本のうたごえ祭典は地域おこし　地域に芽吹くエネルギー」（上殿紀久子）は、地域祭典ふくめて、うたごえ祭典開催のテキストとなった。

うたごえ新聞に対応する特徴（季刊発行サイクル・長文掲載可能）をいかして、実践、提言・意見交流等企画の充実、読み深めることとと合わせ普及を強化する必要がある。

方針〈５〉うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる。

〔事業・出版活動〕

「うたう喜びと広げる喜びをみんなで」と歌い広める活動は、引き続きの〝S．P．999〟の取組みなどとあわせ、「新版　うた・うた・う

た」歌集を普及。奈良での「うたがき祭典」で歌い交わす中での３３０冊の普及。新しいうたう会・うたごえ喫茶などによびかけた、千葉、宮城、長野、福島・郡山などで各１００冊近く普及、０８年祭典を準備する東京は自治体が主催する「うたごえ喫茶」で歌集を活用する（三多摩）など７６０冊普及する貴重な取り組みをした。

「０７メーデー歌集」は、普及数は若干減少しているが、青年ユニオンなど労働運動との新たな結びつきも生まれている。現場での歌う活動と合わせた普及が６０周年運動にも欠かせない取り組みとなっている。

「０７祭典歌集うたいかわそう」は前年を上まわり、合唱講習会・各練習会で取り上げられ祭典成功の力になった。

これらの歌集の普及は全国的運動として取り組まれ、歌集の普及があらたなうたごえ喫茶の開催など、うたごえ運動のひろがりにもなっている。

「音でつづる日本のうたごえ半世紀」（ＣＤ・１０枚組）は、うたごえ６０周年記念出版として、普及版が復刻された。岐阜では独自チラシ５０００枚を作成し、毎週の出前うたごえなどの取り組みとあわせ２５組、名古屋青年合唱団１００組、神戸市役所センター合唱団６０組、千葉の全県的取り組み３４組、年末ぎりぎりまで知人などにひろめ１８組の兵庫・東播センター合唱団など意欲的に取り組まれた。東京は０８年祭典の財源にと祭典実行委員会一括の扱いで２３０組など、年内１０００組を超過達成した。０８年祭典実行委員会（事業委員会）では様々なグッズとあわせ幅広く普及する基盤をつくり、６０周年のはずみになっている。

「『インターナショナル』や『がんばろう』なんてもう古いんじゃないかな、と思っていたが、このＣＤを聴いて考えが変わった。その強さと柔らかさに心をうたれた。歴史が進むにつれてその時代をリードする創作曲をうみだしてきた、うたごえの歴史を実際に聴いて、学ぶためのバイブルとなった」などの感想が寄せられた。

その他、小林康浩さんの編曲曲集「人間の歌」は東北交流会などで活用された。「『千の風になって』のピアノ伴奏がとてもよい」など好評で、書店・楽譜店からの４００冊注文は特徴的。

ナターシャ・グジーさんは人気も高く、０７祭典 in 奈良をはじめ、北海道ツアーも各地で成功した。特に北見ではサークルづくりのきっかけにもなった。上條恒彦・野田淳子ジョイントＣＤ「夢果てしなく」も好評。

音楽センター出版物、保育・教育・手話などのＣＤ、歌集は各講習会開催とあわせひろがっている。〝つながりあそび・うた〟研究所の演奏活動は全国に幅広くひろまり、ＣＤ・歌集なども大きく普及されている。

宮城のうたごえ協議会が発行した「おばあちゃんから孫たちへ」、奈良恒子著「うたごえに生きて」などの出版も活発に行なわれ、日本のうたごえ祭典などでも紹介した。

音楽著作権を尊重した取り組みはひきつづき大切である。

方針〈６〉演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめ、２１世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる

〔演奏・創造活動〕

西日本合唱講習会は、奈良で１５都道府県１９０人の参加で行われ、開催地からは６０人が参加して充実した講習会となった。当日発表された祭典記念曲も好評であった。発声講師内海緑氏、合唱講師高嶋昌二氏の指導もそれぞれの個性・持ち味がでた内容で楽しく、また学ぶところも大であった。講座の時間にもっとゆとりを持つこと、事前の講師に対する内容の伝達、打ち合わせ、受講者の準備、等さらに改善が必要で今後の検討課題である。

東日本合唱講習会は、東京で７都府県１０４人参加で行われた。地元参加組織に若干の課題を残したものの、６０周年祭典開催を視野におい

たうたごえ運動論講座、また地元の運動の中から新鮮な講師を招くなど講師陣も充実して好評であった。数年来、東京で開催してきたことによる新しい連帯感と蓄積も生まれている。今後、さらに要求の高まりに応え、また生み出す継続が必要である。

全国指揮・合唱指導講習会（教育講習会）は、松本市で１９都道府県１００人の参加で行われ、「参加者も増え、充実した講習会でとても良かった」「どの講座もとても魅力的で、たくさんのエネルギーをもらった」などの感想が多く寄せられ、コース別指揮法の受講者総勢４０人など積極的な参加意識が見られた講習会となった。それは、「リーダーとしての自覚をもっと持とう」「団員の主体性が音楽創りの上で発揮されているか」などがどの合唱団でも大きな課題になっていることの一つの表れでもある。

若手の継続的な参加は講習会全体を生き生きさせる要因ともなっている。大谷研二氏の合唱特別講座、工藤俊幸氏の指揮法特別講座が共に参加者の要求に大きく応えた内容であった。「練習は効率と楽しいことが大切。合唱指導は相手によって変わり、同じやり方は有り得ない」「体を開くこと、息を出すこと、発声練習の観点を」など示唆に富む指導で、合唱隊とのコミュニケーションのとり方、歌い手一人ひとりの把握と作品に対する観察の鋭さに多いに学ばされた。

その他、発声指導、コース別指揮法、合唱、理論講座、交流会等、日程と内容もふさわしいものであった。今後の検討課題としては、指揮・合唱曲の選曲、初心者への対応、うたごえ理論講座の内容と継続に期待が大きいこと、などがある。各合唱団で、責任ある立場でがんばっている世代の横のつながりが持てる貴重な場としての存在も大きい。

地方講習会は、北海道の講習会が室蘭で行われ、全道から約１２０人の参加で成功している。全道からくまなく参加、そして各地が講習会参加曲を事前練習してきていること、とくに開催地となった室蘭（登別）から市民合唱団、中学生などの参加が講習会を盛り上げた。地元合唱連盟の指揮者の講座も大胆に切りこんでくる新鮮さをおぼえ、次年度につながるエネルギーを感じる講習会となっている。また、九州ブロックでは講習会が九州祭典、長崎の原水禁世界大会、日本のうたごえ祭典への練習会に連動して継続的に行われている。

その他、〝東京指揮考座〟が４月より月一回ペースで始まった。参加者は指揮受講者と見学者で若手からベテランまで、基礎的な課題曲と練習曲の持ち寄りで継続され、学習と交流の新しい連帯の場になっている。また、大阪指揮研究会も継続されている。

こうした「学ぶための情報、機会」をもっと全国的に交流し、引き出し、全国が課題とする共通のものが地方の講習会や各合唱団の教育活動に盛り込まれることが大切であり、新たなリーダーを生み出すこととあわせ、運動の発展にとって不可欠である。

方針〈７〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、２１世紀を担う青年をたくさん迎える

〔青年のうたごえ〕

０６年に東京で初めて開催された「全国青年のうたごえ祭典」を受けて、すぐに「０７年の開催地はウチで！」と名乗りを上げた京都。京都地方労働組合総評議会青年部長を実行委員長に迎え行われた「第２回青年のうたごえ音楽祭 in きょうと『響感。』」には、全国から３００人が参加し、歌や踊り、太鼓で交流した。京都うたごえ協議会が全体をあげて協力体制をとり、準備から当日までサポートをしたことは、青年たちにとっても協議会を身近に、頼もしく感じさせるきっかけとなった。特に、郷土のステージは青年を出演だけでなく運営にも大きく巻き込んで祭典を創り上げたことは、全国にとっても刺激となった。

日本のうたごえ祭典開催地、奈良の青年たちはうたごえサークル〝うたごえっぐ〟の輪を広げ、大音楽会・青年のステージ本番には５０人が参加し、全国からの参加をあわせて１３０人の舞台となった。今年も開

催地の青年たちを中心とした創作曲が合同曲として取り組まれたことは、毎年意欲的に青年独自の創作合宿が取り組まれている成果といえる。

地域交流では、「響感。」に向けた関西青年のうたごえによるプレ企画交流会の他、長野、山梨、群馬、新潟で青年のうたごえのネットワークを作ろうと、初めての交流会を開催した。

この数年間、どちらかと言えば平和分野で活動が活発というイメージのあった青年のうたごえだが、若い労働力が不当に買い叩かれている労働・雇用情勢の中で、「人間らしく暮らしたい」と願う青年たちとともに歌う場面が多く見られる年となった。

青年ユニオンなどが呼びかけて5月に明治公園で行われた全国青年雇用集会では、青年のうたごえのメンバーも全国から集まり、パレードを盛り上げた。首都圏青年ユニオンとはうたごえ60周年に向けた取り組みの中で創作も行われ、新曲「ありがとう」が生まれた。産業別祭典でも、教育、保育、医療などで青年が活躍し、港湾祭典では港湾労働組合青年部が「全国の青年交流の場」と位置づけて参加を呼びかけるなどの共同も進んでいる。

一方、青年労働者を組織したサークルが経済面等の理由で活動が困難になる状況も生まれている。次世代をどうサポートしていくかはこれからも変わらず課題となる。「労働歌は青年には受けいれられない」という意見もある一方で「人間の歌」など、現場の青年に好感触で受け入れられている歌もある。青年の心に届く働く者の歌も数多く求められている。

平和を求める運動の中では、原水爆禁止世界大会の中で、今年も「青年のひろば・パート2」をうたごえが中心となって企画を作った。また、東京や岐阜で開催された憲法フォークジャンボリーで運営・出演ともに若い世代の参加が目立ったことも注目される。

仙台のアカペラ講座、東京・三多摩などの憲法ミュージカルに多くの青年が参加していること、九州・宮崎の日本青年団協議会が「ぞうれっしゃがやってきた」で町おこしに取り組んでいることは「歌いたい」という要求が青年の中にはまだまだあることを実感させる。また、全国創作合宿や、全国指揮・指導者講習会などに参加する青年の数が年々増えていることや、東京ではにんたま合唱部がうたごえの先輩を講師に招いての運動学習会に取り組むなど、「学びたい」という要求も高まりを見せている。それらの要求を拾い集め、つなげていく工夫と努力は、全国の経験を広く交流しながら、さらに前進させていく上で重要である。

方針〈8〉サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

〔組織建設〕

歌いたい、つながりたい、表現したいという要求の強まりと、旺盛な演奏普及活動の中、会員が増えている団体が見られる一方で、例会が開けず未活動状態になっている団体も生まれている。

07年祭典、08年祭典準備の中で、協議会加盟を増やしている奈良、東京、05年祭典in ひろしま後の広がりの中で、県内各地にうたう会・サークルが生まれている広島、持ち回りの祭典開催をつづける中で新たな開催地で全国協議会に加盟した北海道・苫小牧などの他、栃木、埼玉、長野、兵庫で加盟団体を増やしている。全体としては、加盟団体数、会員数共に微増にとどまった。

「9条を守る市民合唱団」のような取り組みの広がり、うたう会、うたごえ喫茶の広がり、演奏会での特別団員、市民団員の広がりを会員拡大につなげる意識的な取り組みが大切である。

また、サークル・合唱団同士の活動を交流し連帯を強め、共同のとりくみを発展させる上での協議会の強化拡大は急務である。

協議会が一つひとつのサークル・合唱団にとって「見える」うえでニュースの発行は大切である。編集委員を決めて定期的なニュースの発行、協議会の役員会の前には必ず四役会議を開き、議題の整理、運営を意思

統一し、ほぼ１００％に近い団体の出席で協議会運営をし、毎年加盟団体を増やしている千葉に学びたい。

ブロックの連帯の取り組みでは、ブロック祭典を継続して取り組んでいる北海道、九州、交流会を毎年開催している東北、関東、ブロック会議が定例化されている関西、関東などで、情報の交換、日本のうたごえ祭典の取り組み、講習会の開催などで成果をあげている。支え合い励まし合う、共同のとりくみのセンターとしての協議会、ブロックの活動を、各加盟団体の意識も高めながらさらに活発にすることが求められている。

〈うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」読者拡大〉

「５・３・９」「８・６・９」「うたがきキャンペーン」「年末キャンペーン」と、全国会議も開催しながら、ほぼ年間を通して〝Ｓ．Ｐ．９９９〟と読者拡大、歌集普及を取り組み大きな成果を上げた。特に読者拡大では、「運動の広がりを読者に結ぶ」意識が定着し始めている。

奈良では、「祭典成功の基礎作り、財産作りはうた新読者拡大で」という、ここ数年の祭典開催地での取り組みの教訓を最大限に生かし、祭典実行委員会全体で取り組み、約４倍加の読者拡大を実現した。祭典後も、「６０周年のうたごえ運動」を訴え、継続購読の努力が行われている。

６０周年記念祭典を控えた東京でも、「うたごえ新聞推進委員会」を立ち上げ、ニュースの発行、うた新フォーラム、うた新まつりの開催、推進委員が先頭に立っての読者拡大行動を積み重ねる中で、年末には１日で４０人余の読者拡大を達成するなど、この間３００人の新読者を迎えている。

単一団体として全国一４２０人の読者を抱える神戸市役所センター合唱団は、退職による購読中止が多くなる中で、運営委員会や練習日に「一斉テレフォンタイム」を設け、全団員が対象者に電話をかける取り組みを実行し、運動の貴重な財産である読者を維持しつづけている。

その他、宮城、千葉、大阪、広島で２桁の前進したのをはじめ、全国の奮闘で創刊５０周年時に到達した近年最高の読者数を一時的には突破した。運動の広がり、果たしている役割から見ると、過去最高時読者を突破し、大きく前進することは６０年を経過した運動がさらに大きな力を持つ上で欠かせないものとなっている。

季刊「日本のうたごえ」読者は会員の約半数にとどまっている。学びながら行動することが６０年にわたる運動の成果を未来につなぐ上でも大切になっている。運動や音楽づくりについて論議を深め、確信を持った運動を展開のために、この機関誌をさらに充実させながら、多くの会員が購読し、力にしていくことがもとめられている。

方針〈９〉〝郷土のうたとおどり〟を活発にし、専門家との協力協同、全国講習会の充実、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりにつながる活動を計画を持ってすすめる。

〔郷土のうたとおどり〕

０７年祭典 in 奈良で取り組まれた全国郷土合同「豊年太鼓組曲」は、地元・全国合わせて９０人近くが舞台に立ち、元わらび座の中田純さんが指導する奈良県山添村布目和太鼓クラブや奈良蟻の会合唱団民謡部のみなさん方のリードで合同演奏を成功させることができた。うたごえの全国合同としては、中田さんと奈良のメンバーに関東・関西それぞれの地域講習会に指導に来ていただいた結果、東京・神戸・姫路から２０人が合同演奏に参加することができたが、近年、祭典の郷土合同に参加する地域が一定限られてきていることが今後の課題の１つといえる。

全国講習会は、東日本では１７０人が参加。締太鼓、チャッパ、担ぎ桶太鼓等、多様な演奏要求に応えたかたちで講座が開かれている。この成功の教訓は、実行委員会が組織され方向を確認しながら実践交流し、学びあうことを重視している点にある。

地域での郷土のまつりは、全国的にも年々盛んになり、東京の「江戸やっこまつり」、川崎での「和太鼓と民謡・民舞まつり」、兵庫の「和太鼓と民舞のまつり」、「西播和太鼓フェスティバル」、愛知での「日本の響き大地の舞」などは内容的にもバラエティーに富み、充実したものとなっている。このほか、東京・南部合唱団郷土部でも南部うたごえ祭典の中で地域のチームを巻き込んだ舞台、調布では地域合唱発表会で郷土の舞台をつくる等の太鼓チーム同士の協同活動も進んできている。

こうした中でプロ、プロチームとの連帯活動も発展してきており、川崎では、三浦恒夫氏の「鬼剣舞」教室、田楽座の和太鼓教室、神戸の輪田鼓では柿崎竹美氏の民舞教室、和太鼓としの笛、琵琶で奏でる源平ものがたり「源平遥かなり」をプロとの共演で初上演を成功させている。

今後、和太鼓と民舞のまつり全国展開プラン、郷土センター設立を旗に掲げつつ、うたごえのめざす民俗芸能活動のあり方を深め、交流していくことが重要である。

方針〈１０〉世界の音楽家、音楽団体との国際交流を広げる。アジア、世界への視点で６０周年に向かう国際交流の輪を広げる。

〔国際交流〕

全国協議会が主催した国際交流として、〝「アジアの風」韓国（光州、仁川）の旅〟に東京、埼玉、神奈川、兵庫、岡山、広島から２０人が参加した。これまでの〝５・１８光州芸術祭〟での演奏交流に加え、仁川市市民文化交流センターとの交流が実現、０７年祭典 in 奈良には同センターの代表、事務局長が参加し相互の交流が始まった。草の根の文化運動をすすめる団体どうしの国際交流として、さらに発展させていくことが期待される。また光州全南大学「５・１８国際学術大会」に日本のうたごえとして招待を受け、国際交流委員の小林光氏が「日韓音楽交流１０年」と題して講演した。

「悪魔の飽食」縦断コンサート全国連絡会による初めてのヨーロッパ公演が１４０人の参加で実現し、〝アウシュヴィッツ〟の地で永遠の不戦を歌い上げ大きな感動を誘った。

南京大虐殺７０年の年に、第６次の全国紫金草合唱団が演奏、平和な未来へつないでいくかけはしの役割を果たしている。紫金草合唱団の交流の中から、０７年祭典 in 奈良への南京理工大学生の「龍の踊り」の招聘が実現し、青年同士の交流も意義深いものとなった。さらに、０８年７月の日本のうたごえ合唱団南京公演の実現へとつながった。

合唱組曲「光の種子をまくとき」が取り持ち長野・松代で日韓市民文化交流 in 松代が開催された。

在日外国人との国際交流や、単一サークル・合唱団や有志による国際交流も盛んになっている。

2007年日本のうたごえ祭典in奈良

総括

２００７年日本のうたごえ祭典in奈良実行委員会

Ⅰ　はじめに

「大音楽会に参加していると、自分も何かできることをやろうという気力が体の中からわいてきた」「〈大うたがき〉まで残ってうたっていて、感動の涙が出た」「いま生きていて心を一つにしているという証を実感した」など、初めてうたごえ祭典に参加した多くの人々から感想が届いている。

うたごえそのものが小さな運動体で、他の民主的運動も決して大きなものとはいえない奈良の状況の中で祭典ができるのか、心配のほうが大

きかった。実際、祭典開催を決定して動き出してみると、ほかに頼るところはなく、一人ひとりが何かにかかわらないと何もできない。そんな中で、自分にできることなどないのではと思っていたうたごえ協議会のメンバーも、共通の目標である「祭典」に向かって質的に変わっていった。家族など自分の周囲の人も巻き込み、知人・友人にうたごえ祭典を説明し、賛同金・広告への協力を訴え、うたごえ新聞を読んでもらい、祭典チラシ配布をお願いする。

それぞれが個性の違いを認め合い、その中で自分の分担を不十分ながらも果たしていく。動くと成果につながり、運動が広がる。それは、自分たちで考え、実際にあたっていく一人ひとりの草の根運動の積み上げの結果だといえる。

祭典という一大事業の成功は、かかわった一人ひとりに達成感と、みんなが結集すれば一人の力をはるかに超えることができるという自信を与えた。これは祭典の感動とともに、奈良のうたごえ運動にとっての大きな財産であり、今後のサークル・合唱団活動のエネルギーになるだろう。

Ⅱ　とりくみの経過

全国協議会からの打診（２００３年５月）を受け、同年１１月にスタートした「うたごえ祭典開催を考える会」は、協議会加盟各サークル（当時は６団体）が活動拠点としている県下各市町をまわって２００５年２月まで計６回開かれ、うたごえ祭典のイメージや「奈良らしさ」「奈良から発信したいもの」など、夢を語り合うところから検討を始めた。

回を重ねるごとに議論は、人員・会場等奈良の持つ条件や、祭典への個人の関わり方・マンパワーの問題など、祭典開催の可否に踏み込んだ内容となっていった。同時に、出される意見も一般論から個人の視点に立った意見が増えていった。もちろん、「無理」「しんどい」「どれだけ関われるか……」といった不安を訴える声も多く出たが、最終２００５年２月の「考える会」では「結局、やりたいか、やりたくないか」で突っ込んだ議論が交わされ、大勢は「やろう」という方向で固まった。

２００５年４月１０日、奈良のうたごえ協議会総会において、「２００７年日本のうたごえ祭典」の奈良開催を決議した。この間に加盟サークルは８団体に増えていた。決議文『夢を見ながら祭典を』は即日全国協議会へ送られ、折しも開催中であったうたごえ新聞５０周年レセプションで披露されて感動を呼んだ。

同年１２月１８日、「２００７年日本のうたごえ祭典 in 奈良」実行委員会準備会を発足、企画部会・組織財政部会・広報事業部会に分かれて準備活動を開始した。以後７回の準備会をもち、祭典日程の調整、会場確保、プレ企画「奈良のうたごえ祭典」の企画・準備、賛同よびかけ人の募集、県内への宣伝、準備会としての祭典グッズ販売等々を進めた。その中で２００６年２月、奈良市内に開設した祭典事務所は、あらゆる活動の拠点としてその価値を高めていった。

２００６年７月２３日、よびかけ人７９名（最終９４名）の賛同を得て「２００７年日本のうたごえ祭典 in 奈良」実行委員会が発足した（２００８年１月２７日まで、計９回開催）。

祭典成功のために「日本のうたごえ祭典 in ふくい・北陸」（以下、ふくい祭典）に学ぼうと、同年１１月に開催された祭典に奈良から２３名が大音楽会要員として参加した。ふくい祭典にはその他合わせて約１００名が参加し、音楽会フィナーレで福井からのバトンをうけた。

同年１２月１７日、県祭典として２６年ぶりに開催した「奈良のうたごえ祭典２００６」（於やまと郡山城ホール／日本のうたごえ祭典プレ企画）は、１１００名を超える参加者を得て大きな成功を収め、日本のうたごえ祭典開催への大きなエネルギーとなった。

プレ企画としては他に、２００７年８月の「プレうたがき」（うたごえ喫茶）、同年９月の「国鉄大阪合唱団号笛コンサート」、「奈良のうたまつり２００７」（合唱発表会）を実行委員会の主催・共催企画として実施し、いずれもプレ企画としてふさわしい成果をあげることができた。

うたまつり２００７終了の時点で、加盟団体は１１団体となった。

Ⅲ　とりくみの展開

１．組織広報活動
～「だれもが音楽の主人公」の立場で対象を広げて取り組んだ祭典参加運動～

組織広報活動の取り組みは、０７年前半は各種団体へのオルグ、賛同金募集、うたい手組織、プログラム広告募集などに重点を置いた。５月のチケット完成、６月のチラシ完成後は幅広く外に向けて、うたって広げる運動を展開すること、とりわけすべてのサークル員が普及活動に積極的に参加することを重視した。実行委員会では、その取り組みの過程において「だれもが音楽の主人公」という立場をつらぬき、草の根から広範な人々にうたごえを広めていくことを祭典参加運動の核心として取り組んだ。

また、全県を視野に入れながら、地域に密着した祭典参加運動を進めようということで、県下をいくつかのブロックに分けて各サークルに担当地域を割り当て、それぞれのサークルが主体となって祭典参加運動を展開した。その中で、これまで空白であった地域でも祭典参加が進み、桜井、郡山の２地域で新しいサークルが誕生するなど、うたごえ運動そのものの裾野が広がった。

祭典を成功に導いたのは、まさに一人ひとりの地道な活動の積み上げである。全サークル員が主体的に祭典参加運動に取り組むためには、祭典の情報が確実に伝わっていなければならないし、それぞれの人が祭典の魅力を自分の口で語らなければならない。その点で事務局ニュース、祭典実行委員会資料、企画委員会ニュースなどを通じて一人ひとりに情報が届けられていたことは重要である。

（1）うたい手組織～出張練習など工夫凝らした募集活動展開～

祭典参加運動の要であるうたい手の組織は、それぞれの分野の合唱団による取り組みに加え、実行委員会として街頭宣伝、うたう会、うたごえ喫茶、各団体へのオルグなど機会あるごとに全ステージの募集内容を記載したチラシを配り、また、新聞折込やコンサート、イベント等でのチラシ折込、各サークルの演奏でのうたい手募集の呼びかけなどを行った。結果、駅頭宣伝でのチラシや新聞折込を見ての参加申し込みなどがあった。

各分野の合唱団等でもさまざまな工夫をこらした取り組みが行われたが、特筆されるのは、なつかしのうたごえが行った出張練習の取り組みである。アコーディオンやギターをかついで、宅老所などを訪問し、うたう会と練習を組み合わせた出張練習を４０回以上も行い、年金者組合を中心にこれまでうたごえに参加したことのない多くの人をうたい手として迎え入れた。

各分野の募集活動の結果、地元の出演登録者は４９９名にのぼった。奈良のうたごえ協議会加盟員数が約１１０名であるので、実にうたい手の４分の３がそれ以外の人たちである。チケット普及の面でも、これらの人たちが全体のチケットの３分の１を普及しており、まさにうたい手組織がチケット普及に大きく結びついた。

（2）うたってアピール～県内津々浦々で街頭宣伝・うたう会・うたごえ喫茶開催～

一般の人に祭典をアピールしようと街頭宣伝うたう会に取り組んだ。全国実行委員会が奈良で開催された２月１１日を皮切りに、月１～２回、各サークルから毎回約２５～３０名が参加して、計１６回実施。アコーディオンとギターの伴奏で、多くの人になじみのある曲とともに祭典での演奏曲も入れてアピールした。反応は上々であった。また、草の根から祭典を広めていくため、県内津々浦々でうたう会やうたごえ喫茶を積極的に開催しようという運営委員会での提起を受け、各サークル・分野

等で取り組もうという機運が高まった。
一方で、演奏活動にも積極的に取り組んだ。特に九条の会での演奏は相当な回数にのぼり、演奏依頼の数にも期待の大きさが窺えた。また、メーデー、健康まつり、母親大会などサークルの枠を超えて合同で演奏を行う機会が多かったことも特筆すべきことである。分野の合唱団では、職場・男性のうたごえが労働組合関係の集会を中心に精力的に演奏活動を行い、好評を博した。祭典合唱団も「憲法６０年―音楽と講演のつどい」に出演し祭典をアピールした。これらの演奏活動を通じて、より広く祭典への関心を高めた。

（３）チケット普及～一人ひとりの奮闘で目標を超過達成～

０７年２月の全国実行委員会で、地元２５００・全国２０００の組織目標が確認されたが、地元２５００はこれまでの奈良の運動の到達からすれば大変厳しい目標であった。しかし、力持ちのサークル員が全体のチケット普及をリードし、そのことが他のサークル員を励まし、モチベーションを高め、全体としてチケット普及を大きく促した。特に中西和の空白地域での普及が進んだこと、少人数のサークルが困難を抱えながらも健闘したことを高く評価したい。その結果、地元・全国とも目標を大幅に超過達成することとなった。地元では団体として普及に協力してもらえるケースは少なく、人から人への直接普及が基本となった。なお、チケットの普及が目標数を大幅に上回り、チケットを買いながら入場できない、あるいは立ち見を余儀なくされるという事態を招いた。地元実行委員会は地元での普及に集中することになるため、全国を含めた適切な普及のためには、普及状況の摺り合わせを適時行うことが欠かせない。

（４）宣伝活動～地域に密着した宣伝活動の展開～

各サークルに担当地域を割り当て、団体オルグ、公民館へのチラシ置き、自治会等の掲示板へのポスターの張り出し等を実施した。団体オルグについては、協力を広げるため、協議会の６サークルからのべ１９名が参加して２７団体を訪問した。このような行動への参加が初めてというメンバーも多かったが、広告、賛同金などで成果を得られた。

（５）祭典情報発信～地元の取り組みを生き生きと紹介～

実行委員会ニュース「うたがき」は０６年９月に第１号を発行し、同年１２月からほぼ月１回のペースで計１３回発行した。当初は県内向けと全国向けというふたつの役割を担う機関紙としていたが、全国向けの機関紙と位置づけ、できるだけ地元での取り組みを生き生きと紹介するとともに、全国の人たちにも取り組んでもらわなければならない賛同金やチケット普及などの課題について目を向けてもらえるように努めた。
また、祭典ホームページは、祭典に関わる情報を広く外に向けて発信する媒体として大きな役割を果たした。ホームページの更新は奈良蟻の会合唱団のＯＢにお願いしたが、写真がふんだんに取り入れられ、祭典の取り組みの様子が生き生きと伝わってきた。また、祭典に参加するために必要な情報もほぼ網羅されていたと思われる。０６年９月の開設以来、３７０００件を超えるアクセス（０７年１２月２１日現在）があった。

（６）プログラム広告～広告にも奈良らしさを～
プログラム広告募集は、各サークルに目標を割り振り、主としてそれぞれのサークルで広告の募集活動を行うとともに商店街、ホテル、奈良の名産などを重点に募集活動を行った。とりわけ、商店街との交渉の中では、大音楽会当日の事業出店についても話を進めることができた。

２．事業財政活動

（１）事業

①祭典グッズ

祭典グッズは、事業収益もさることながら、祭典キャラクター「音声菩薩」を使って祭典をアピールするという役割も担いながら展開した。東大寺八角灯籠にある浮き彫りをモチーフとした「音声菩薩」は、奈良らしさ、独自性、色合いの美しさなど、どれをとっても奈良の祭典をアピールする上で申しぶんなく、全国での評判も上々であった。

制作した祭典グッズは、キャラクター入りブルゾン・携帯ストラップ・エコバッグ・ベースボールTシャツ、うたがき祭典のど飴・記念酒の計6種類である。いずれのグッズも、おおむね予定通りの販売を実現することができた。

②音楽センター出版物

歌集「うた・うた・うた」、祭典楽譜集「うたいかわそう」などを販売。また、出演者のCD等も大きな売上があった。

③ビデオ・DVD

祭典記録用として、歓迎音楽会と大音楽会を収録。関係各所、希望者に記録資料として08年1月頒布開始。

④野外ブース

祭典2日目の11月24日、大音楽会会場・中央体育館前の野外広場にて、飲食・物産展をおこなった。07年6月より呼びかけをおこない、準備した。

飲食ブースは、いわゆる縁日メニューを9件、地元物産は、奈良県みやげ品連盟の協力を得て6件が出店。その他あわせて、合計18件が出店した。

当日は、天候にも恵まれ参加者の利用も多数あり、各ブースもたいへんな賑わいをみせ、利用者、出店者双方に喜んでもらうことができた。

（2）財政

祭典財政は、借入金・賛同金・チケット・プログラム広告・事業収入の5本柱で構成し、祭典の取り組みの中でそのつど重点となる柱を明確にして取り組んだ。

賛同募金（一般賛同金1口1千円、特別賛同金1口1万円）は、06年10月、まず特別賛同金から始めて、07年1月からは一般賛同金も加えて本格的に取り組んだ。地元目標3500口・全国2000口をそれぞれ3月と8月に超過達成し、祭典のあらゆる取り組みを前進させる原動力となった。

祭典を支える大音楽会チケット普及は地元目標2200枚を祭典当日の2週間前に超過達成、全国の普及状況を見て12日前に札止めを決定した。

プログラム広告・事業収入も全体として目標をおおきく超過達成した。

祭典全体の財政は体育館の舞台・音響・照明、さらには直前になっての大型スクリーンの導入（観客超過対策）で経費が大幅に膨らんだが、チケット普及の拡大、賛同金、事業活動の奮闘により、心配していた赤字にならずに済んだ。

3．うたごえ新聞

うたごえ新聞拡大については、当初担当部署も決まっておらず、かなり立ち後れたが、運営委員会で議論を重ねる中でその祭典運動における位置づけと重要性の認識が深まり、事務局直轄の「うたごえ新聞拡大推進本部」を立ち上げ、強力な拡大運動を推進した。

拡大推進は06年11月現在で134人の読者からスタートしたが、当初はうたごえ新聞拡大の趣旨が協議会会員の一人ひとりにはなかなか伝わらず、成果もあがらなかった。しかし、拡大推進本部のメンバーは、ふくい祭典参加で実感した「人数の少ない奈良のうたごえの力で祭典をつくり、広めるためには、うたい手組織・チケット普及等のあらゆる基盤として、最大の理解者となってくれるうた新読者を増やすことが、きわめて重要」との強い意志を失わず、「いつでも、どこでもうたごえ新聞

を持って」との合い言葉のもとに、地域のうたごえ喫茶等に出かけるなどして根気よく訴え続けた。その甲斐あってか少しずつ成果があらわれて、その後は、新読者１００人ごとの中間目標を含め計画通りに拡大することができた。目標達成のつど拡大推進会議を開催し、「うたごえ新聞拡大推進ニュース」を１２号まで発行した。最終目標５００人の読者は予定通り０７年９月に達成、うたごえ祭典当日は５３８人の読者で迎えることができた。

うたごえ新聞編集長三輪純永さんを招いての「うた新フォーラム」「奈良のうた新まつり」が、拡大推進の大きな力となった。ことに、うた新まつりでは、読者のみなさんとのつながりができ、購読を勧める意味が身近なものとなった。

初めは、一部特定の人が多数の拡大でひっぱることで動き出した拡大運動であったが、次第に広め手そのものが拡がっていって、最終的には奈良のうたごえ協議会加盟団体すべてが、成果をあげることができた。また、会員１人読者１人拡大の大切さを運動の中で確認することができた。これには、うたがきメーリングリストなどの情報交流が大きな力となり、県内だけでなく、全国の仲間を励ました。

「祭典成功のために」と新しく読者になってくれた人が、記事を読むうちに自分も参加しようと決意、後日「うた新を読んでいて想像していた祭典が、想像よりさらに大きな規模で実現していたことに感動した」との感想を寄せるなど、読者にとっても祭典参加運動となるような購読が実現できた。

祭典までの期限付読者に対して、祭典後すぐに働きかけを始め、３０名以上の読者が継続を約束してくれた。

４．運営委員会、事務局体制

運営委員会体制は、準備会から若干組み替え、企画委員会・組織広報委員会・財政事業委員会の３委員会＋事務局の４局体制とした。各委員の所属については、ほぼ個人の希望に添って決定した。運営委員は、各委員会の正副委員長及び推薦委員、各サークルの代表委員、事務局員をその構成メンバーとした。

運営委員会は当初月１回開催、部局長連絡会議を同じく月１回の開催として、２週間に一度の意思決定の体制を整えた。０７年に入ってからは運営委員会を月２回定例化し、０８年１月まで計３０回開催した。部局長連絡会議はその後も必要に応じて開催した。

事務局は当初３名、最終的に５名が実質人員であり、人手不足を否めなかった。祭典事務所運営のため、曜日による各サークル輪番の「事務所当番」をボランティアで派遣、電話番や発送作業等にあたってもらった。このことは、サークルを超えた交流や全員参加という視点から、祭典づくりに対する主催者意識を醸成するうえでも高い効果をあげ、予想される作業を少しでも早い段階から済ませることも可能にした。

活動の進展に応じ、０７年１月にはうたごえ新聞拡大推進本部、４月にはチラシ・プログラム作成プロジェクトを事務局直轄で立ち上げた。

事務局の業務は極めて多岐にわたり、上記のような人員状況での対応は困難であった。ことに、プログラム作成実務と歓迎音楽会申し込みが同時に佳境を迎えた１０月下旬から１１月中旬にはオーバーフロウの状態に陥った。

５．その他

祭典チラシは、準備会時点でのプレチラシから本チラシまで１３万枚以上を県内外に配布した。プレチラシは１色ながら、あえて白紙とした裏面に各合唱団募集など場面場面に必要な課題を印刷して配布、かなり便利なツールとなり、十分に活用された。最終盤になって本チラシ以外に大音楽会に特化した詳細な情報が欲しいとの要請に応え、手渡し用と折込用の２種のチラシを作成、配布した。

ポスターは、組織広報委員会からの強い要望を受けて１０００枚を（格安で）作成した。県内各地に張り出され、祭典への雰囲気づくりに役立った。

事務局ニュースは、県内での情報通知やお願い等をその主内容とし、０６年１１月より計３０号を発行した。

祭典に関する情報交換のツールとして、県内外へ積極的によびかけて「うたがきメーリングリスト」を立ち上げ、８９名の参加で４００通近くのメールがやりとりされた。

プログラム作成にあたっては、全国合唱発表会関連（全国協担当）の入稿前にその他の部分を校了することをめざし、一定の成果をあげた。期日を大幅に超過する原稿が多く、全体の作業は遅れたが、なんとか予定通りの刷り上がり・納品となり、かつ、２１世紀初の「正誤表折込なし」の仕上がりとなった。売れ行きも上々で、地元に残す冊数が不足するほどであった。

大音楽会会場の内外に立てる立て看板を大小９１枚用意し、案内や歓迎の用に供した。

大音楽会当日の要員体制については、うたごえ内部ではなく、外部団体等からの要員を主軸とした体制をめざし、かなり早い時期からお願いに回った。残念ながら募集は難航し、結局予定した定数は確保できなかった。その結果として東京をはじめ全国からの要員の皆さんに、大きな負担をおかけした。その中で、各要員の皆さんが、各自の主体的判断で適切に対応していただいたことに、心より感謝申し上げたい。

各種ミニコミは宣伝面で力になったが一部を除きマスコミとの密接な関係の構築に至らなかったことは残念である。

Ⅳ　企画活動

１．祭典の基調　いまを生きるわたしたちの祭典に

祭典の基本構想については例年のそれを受け継ぐとともに、奈良らしい祭典をめざし、奈良の地の歴史的背景を過去への憧憬としてではなく、いまを生きるわたしたちの視点から捉え直し、祭典の基調として、「アジア」「暮らし」「憲法」という３つの原点・キーワードのトライアングルの中に「平和と共生」を位置づけることとした。キャッチフレーズは「ともに生き、ともにうたおう、はるかなときをつむいで」、祭典の愛称は「うたがき」祭典とした。祭典テーマ曲は、木下そんきさんに２曲の作曲を委嘱した。

２．議論を重ねた音楽会の企画

（１）歓迎音楽会

歓迎音楽会は、じっくりと味わってもらえるものにしようと、日本のうたごえ合唱団、全国男声合唱団、歓迎の意味を込めて奈良のうたごえ合同と、同じく大和舞ばやしを。ゲストにはいずれも地元から、真言律宗西大寺派宝生会（声明）、南都楽所（雅楽）、松本真理子さん（マリンバ）、宋茜さん（ソプラノ）をお迎えした。

（２）大音楽会

大音楽会のゲストについては、奈良のわらべ歌をうたい続けているまつぼっくり少年少女合唱団、天理大学雅楽部、また、ナターシャ・グジーさん、サントゥール奏者谷正人さんにご出演いただくこととした。南京理工大学学生による「龍の踊り」の招聘は、紫金草合唱団の強い要望が実現したものである。うたごえ関係のステージとしては、合唱と和太鼓合同（山添村布目太鼓クラブと共演）、アコーディオン合同が実現した。合唱のステージについては、奈良のうたごえ祭典で取り組んだ、なつかし、障害者、保育、青年、女性は、その経験を活かして取り組みを進めていくことが、また、全国うたごえ合同も、毎年恒例のステージとして、早い段階で取り組むことが決められた。一方、職場・労働者のうたごえについては、奈良では、その核を担うことのできるサークルがないという困難に直面していたが、大阪の職場のうたごえ連絡会との連帯に依拠

してステージをつくっていくこととなった。「子どもを守るうた」のステージについても同じ困難を抱えていたが、奈良県内で現職・退職教員に地道に声をかけ、さらに大阪のＰｅａｃｅ　Ｃａｌｌの協力などもあり、実現の見通しが得られることとなった。さらに、祭典でぜひ演奏したいと取り組まれたのが、「ボクたちのさがしもの」である。この歌のメッセージをいまこそ大勢の人に届けたいと取り上げることとした。

３．大音楽会後に大うたう会を

会場の全員でうたいかわす場面をぜひともつくりたいと議論を重ねた結果、大音楽会終了後に引き続きうたう会を実施することになり、これを「大うたがき」と称することとした。シングアウトリーダーを京都の竹内正彦さんにお願いし、大うたがきプロジェクトを立ち上げ、選曲にあたった。伴奏は京都の山本忠生さんらによるボランの仲間にお願いした。

４．連帯の証、国鉄大阪合唱団号笛コンサート開催

職場・労働者のステージをつくるうえで大きな力となってくれた大阪の職場のうたごえ連絡会加盟団体の一つである国鉄大阪合唱団号笛は、自らのコンサートを祭典プレ企画として奈良県斑鳩町で開催し、強い連帯のメッセージを送ってくれた。コンサートのプログラムには、祭典大音楽会の女性、職場・労働者のステージと歓迎音楽会の男声合唱も組まれ、国鉄労働者の思いを込めた号笛のステージと相まって、祭典への期待を高めた。

５．全国の参加運動

全国では、東西の合唱講習会を起点に、県・地域ブロックでの練習が行われた。

九州や長野の地域祭典では、「ふるさとの風」や「ＨＡＰＰＹ　ＸＭＡＳ」などの曲が演奏曲として取り上げられ、東京・愛知・大阪・京都・兵庫などでは各ステージの、あるいは合同の練習会が行われた。

女性のうたごえが、毎年連絡会として系統的に取り組んでいる東京・大阪・京都・兵庫はもとより全国各地の参加を増やし、出演登録も計画的に進め、近年では最も多い参加者でステージをつくるなど、当日は全体でのべ２０００名を超える出演者となった。

なお、全国の出演登録締め切りが守られず、当日の演奏づくりやチケット札止めへの対応に支障をきたしたが、各都道府県で祭典参加運動（祭典参加プロジェクトづくり、うたって参加、チケット集約等）に計画的に取り組むことが重要になっている。

６．熱気と感動にあふれた音楽会

（１）歓迎音楽会「はるかなときをつむいで」

１３００席が満席となった会場からは、多彩なゲストのすばらしい演奏とともに、日本のうたごえ合唱団、全国男声合唱団、奈良のうたごえ合同という性格の異なる３つの合唱のステージに惜しみない拍手が寄せられた。

（２）大音楽会「ともに生き、ともにうたおう」

開演時、すでに会場は満席となり、１階出演者席を一般来場者席に振り替え、出演者には第２体育館でのモニター鑑賞をお願いするなどの変更を余儀なくされたため、混乱が生じたことは否めない。また、１階客席は高低差がなかったため、ステージの様子がほとんど見えないこととなった。これについては早い段階で対応を検討したが、対応策を講じることは、準備・撤収の時間および財政的に困難であると判断せざるを得なかった。企画が全体として好評であっただけに、十分に見ていただけ

なかったことは残念である。一方、心配された音響は、近年の会場に比してよかったようである。

出演者数は実数で２０００名を越え、のべでは３０００名を上回った。全国からの登録申請に全国協議会で対応していただけたことで地元の負担は軽減されたが、登録の徹底と、早めの登録は、今後の課題であろう。

企画内容については、奈良らしさとうたごえらしさがともに満載された企画だといっていただくことができた。

合唱のステージについて、いずれも大人数にもかかわらず一定の演奏水準に達していたとの評価を得た。これは、どのステージについても、地元が演奏の核となる出演者を組織し得たこと、全国で祭典に向けた練習に取り組んでいただけたことが実を結んだといえる。また、メイン会場以外の施設を練習会場として、当日いずれのステージについても舞台リハの前後に１時間の練習時間を確保できたことも、よい結果につながったと思われる。

来場者も、体育館という決して良好とはいえない環境にもかかわらず、静かに、かつ熱心に鑑賞してくださり、どのステージにもあたたかく大きな拍手を贈っていただいた。「音楽に酔いしれた」「歌がこんなに力を与えてくれるとは思っていなかった」などの感想が、感動の一端を物語っていよう。また、来場者の静かな熱気とでもいうべきものが出演者にも伝わり、よりよい演奏が実現されたと思われる。

全体で１７ステージ、なかでも第３部のうたごえのステージはいずれも１００名を越えるステージが続いたが、全体での予定時間を１０分程度の超過におさえることができたのは、事前に周到な用意をするとともに、当日のリハーサルの状況によって動線を変えるなど臨機の対応をしてくださった舞台監督をはじめとするスタッフの尽力と、ゲスト対応、誘導、舞台の要員の方々の十二分の支えによる。謝意を表したい。

（３）大うたがき

大音楽会終了後、引き続き、１０００名近くが参加して大うたがきが開催された。大音楽会後にうたう会を独立させたことは新たな試みであったが、「みんなでうたうこと、うたいかわすことの意味、大切さ、感動をあらためて感じさせてくれた」との声が、大うたがき開催の成果を物語っているといえよう。

Ⅴ　まとめにかえて

日本のうたごえ祭典in奈良は、奈良のうたごえ運動５５年の記念すべき年の開催となったが、それが大きな成果を収めることができたのは、主に３つの要因によると思われる。

第１には、５５年に及ぶ地元の運動が実を結んだこと、第２は、近隣地域の仲間との連帯、そして第３は、全国の仲間たちの応援と参加である。これを要するに、祭典開催地におけるこれまでの地道な運動の積み上げと、近隣地域を含む全国の運動の力が、祭典の成功をもたらしたといえる。

また、奈良での祭典開催にあたっては、うたごえ協議会加盟団体数においても会員数においても決して大きいとはいえない現状をふまえ、無理に背伸びをすることなく、等身大のものにすることとした。それがこのように大きな花を開かせることができたことは、同規模の地域での今後の祭典開催の可能性を示すことになったのではなかろうか。

加えて、今祭典は、郵政選挙での与党圧勝、改憲を政治課題に掲げた安倍内閣の登場という、危機的状況の中で準備が進められてきた。こうした状況が、それに抗う思い、歴史の歯車を逆に戻そうとする動きを許さない強い意志となって、祭典を支えたことを忘れてはならないだろう。うたごえ運動の３つの柱、「うたはたたかいとともに」「うたごえは平和の力」「うたごえは生きる力」は日本国憲法の心と響きあっており、奈良祭典を成功させることは、文化運動において改憲にノーを突きつけることでもあった。

祭典にはのべ１２０００名が参加したが、これだけの人々を結集する

ことができたのは、うたごえ運動の根本にある文化の力によるものである。祭典を機に、わたしたちはあらためてうたごえ運動の意義と力を確信し、それが真に平和で民主的な社会と世界の構築に寄与することを確認したといえる。

今年は折しもうたごえ運動６０年。これまでの運動に学び、その成果を受け継ぎながら、新たな第一歩を踏み出す年である。大きな期待をもって、奈良から東京へ祭典のバトンを渡すとともに、祭典の成果を活かして、奈良でのうたごえ運動を着実に前進させていきたい。

憲法の心をうたい、輝かせ、新しい地球（くに）づくりを

うたごえ運動６０周年・０８年活動方針

活動方針

方針〈１〉人々のねがいを結び、歌いつがれてきたうたを歌い、創り、「みんなうたう会」を旺盛に展開し、〝共に生きる町づくり・地域づくり〟のうたごえを広げる。

全市区町村、わが町・わが暮らしに、世界の羅針盤、平和憲法・九条をまもるうたごえを響かせる。

①〝いつでもどこでもうたごえを〟を合言葉に一人・合唱・器楽・和太鼓と民謡・民舞…多種多様な形態で大勢の人とともに歌う喜びをひろげる。

イ．「ＳＩＮＧＩＮＧ　ＰＥＡＣＥ９９９」運動を、すべての合唱発表会参加団体がとりくむことをめざす。新版「うた・うた・うた～ａｌｗａｙｓ」をあらゆる機会に広げる。（０８年目標　部）

ロ、サークル・合唱団、協議会で「うたごえ九条の会」をつくり、音楽家、音楽愛好家とともに「音楽・九条の会」をつくり、７０００の地域、職場、分野別の「九条の会」にうたごえを届けながら、さらに運動を広げる。

〝すべての国が憲法九条をもつ世界へ〟と開く「９条世界会議」を成功させる。

ハ、すべてのサークル・合唱団は旺盛な演奏普及活動を行い、全市区町村で〝みんなうたう会〟を計画を持って実践する。

ニ、人間らしく生き、働くために、地域・職場からのうたごえを起こす。不安定な非正規雇用の増大、正社員の異常な長時間労働、不当解雇や雇い止め、男女賃金差別、偽装請負など不当労働行為とたたかう人々、とりわけ、未来をつくる若者がワーキングプアなどの苦しみから解放され、生き甲斐を見いだせる力になるうたごえを広げる。

②多くの人が〝こぞって歌える〟愛唱歌を創りだす創作運動を活発にする。

イ、歌を創り生まれた作品を歌い、〝みんなでつくり歌う運動〟を広げ、「日本のうたごえ創作センター」の機能を充実させ、創作活動家を生み出し、創作活動と作品交流を発展させる。

ロ、２月２２～２４日開催の全国創作合宿 in 岡山を内容・参加運動とも成功させる。

③うたごえ運動６０周年記念企画〈～うたは歴史を刻む～「うたごえと日本の作曲家たちコンサート」〉を成功させる。

①歌う喜びを出発点に、いのちや音楽の輝きを人々に届ける豊かな演奏創造を発展させる。

方針〈２〉合唱発表会を地方、産業別、全国とも活発にし、歌う活動の実際を交流し、学び合い、創造の前進をめざす場にする。

①合唱発表会を協議会活動の年間活動の柱に据え、演奏・講評を通じて交流し学び合うという発表会の原点をいっそう輝かせ、さらに改善を進める。

②新しいところに積極的に参加を呼びかけるとともに、開催の仕方、運営を工夫し、フェスティバル的内容を盛り込むなど豊かな交流ができる合唱発表会をつくり、ひろげる。

合唱発表会参加団体を１３００団体に、未開催県の今年度開催計画を持つ。

方針〈３〉地方祭典の全都道府県開催をめざし、日本のうたごえ祭典の長期開催計画を持つ。

①うたごえを起こし、新たな発展をめざす「うたごえ祭典」の役割を輝かせ、地域、都道府県、産業別、階層別祭典を活発にし、祭典運動の新たな前進をめざす。

②「６０周年記念　２００８年日本のうたごえ祭典 in 東京」を全国の連帯で成功させる。

②２００９年日本のうたごえ祭典 in 京都（仮称）開催の準備を進め、２０１０年以降の祭典計画を祭典プロジェクトで検討、案を持つ。

方針〈４〉歌の広がりをうたごえ新聞読者につなぎ、豊かな〝うたごえ発ジャーナル〟を確立する。

今、生きる人々の願い・思いを歌にしてつなげるうたごえ運動の魅力を伝える〝うたごえ発ジャーナル〟、その役割を一層輝かせ、豊かな紙面作り、読み・広げる活動を展開する。うた新フォーラム全都道府県開催と合わせて進め、史上最高の読者を迎える。

季刊「日本のうたごえ」の位置づけを高め、加盟員全員購読を積極的にすすめ、新読者を１５０人増やす。

方針〈５〉うたごえ出版物をより多くの人にひろめ、様々な出会い・ドラマ・感動の輪を広げる。

すべての協議会加盟団体に事業担当を置き、事業普及活動を活発にすすめる。新版「うた・うた・うた」、「０８メーデー歌集」、「０８祭典歌集」「音でつづる日本のうたごえ半世紀ＣＤ・１０枚組」（復刻盤）などを活用し、旺盛な普及活動をすすめる。

方針〈６〉演奏・創造を発展させ、また、運動の理念を受けつぎ発展させる学習・教育をすすめ、２１世紀の運動をになうリーダーづくりを計画的にすすめる。

それぞれのサークル・合唱団での教育を日常の練習や実践の中で行うことを重視するとともに系統的に各種講習会への参加を強める。経験あるリーダーにつづく中堅、若手リーダーが力を発揮し、育っていけるよ

うに協議会でも計画的にすすめる。演奏・創造活動を豊かに発展させ交流し、批評活動や運動の理論活動をすすめ、力にしていく。

①教育・学習運動を活発にし、２１世紀の運動を担うリーダーづくりを計画的にすすめる。

②各種全国講習会へのサークル・合唱団からの参加を強める。

③日本のうたごえ祭典合同企画への参加を強め、日本のうたごえの創造的前進をめざす。

④合唱指導者懇談会の開催（全国指揮・合唱指導講習会時）、指揮者教育者会議（グループ）の結成、指揮者連絡会等、教育システムの組織化をすすめる。

方針〈７〉青年の要求に応えた音楽づくり、青年サークルづくりを積極的にすすめ、２１世紀を担う青年をたくさん迎える。

①青年の要求に敏感に目を向け、仲間づくり、サークルづくりと団体・分野を越えたネットワークづくりを強める。

②「運動する力」「音楽する力」をつける「学びの場」を系統的につくる。

③青年学生部を充実させ、全国を視野に入れた青年のうたごえの連帯を強める。

方針〈８〉サークル・合唱団をつくり、大きくし、うたごえ協議会の強化と建設をすすめる。また、ブロックの連帯活動を活発にするため、ブロック連絡会づくりを強める。

サークル・合唱団を新しくつくり、サークル・合唱団員を増やし、合唱発表会参加団体、協議会加盟団体、うたごえ新聞・季刊「日本のうたごえ」の読者を増やすことを目標持って計画的にすすめる。

合唱発表会参加団体を１３００団体に、都道府県うたごえ協議会の確立目標を持ち、加盟団体を５００団体にする。

方針〈９〉〝郷土のうたとおどり〟を活発にし、専門家との協力協同、全国講習会の充実、和太鼓と民舞のまつりの全国展開プラン、まちおこし、まちづくりにつながる活動を計画を持ってすすめる。

方針〈１０〉世界の音楽家、音楽団体との国際交流の輪を広げる。

韓国（光州、仁川）交流、日本のうたごえ合唱団南京公演等を成功させ、アジア、ラテンアメリカ、世界への交流の輪を広げる。

おわりに

私たちをとりまく情勢と、うたごえの活動を見る時、戦争する国・格差と貧困の社会を許すのか、そうではなく、憲法が人々のなかに生かされる社会をつくっていくのか、その大きな岐路に立っていることをあらためて感じ取ることができる。

年金が宙に浮き、格差が広がり、値上げの嵐が吹き荒れるなかで、人間の尊厳を、平和をうたい、闘う人々を励まし、立ち上がる勇気と心を結ぶうたごえはますます求められている。

昨年末、「貧困と格差に立ち向かう青年たちの歌を」と首都圏青年ユニ

オンのメンバーとともにつくった＝諦めない　今　この瞬間を支え合う暖かな気持ちに　心から　ありがとう…「ありがとう」（６０周年創作プロジェクト）が、〝大塚のうたごえ酒場 in 全労連〟で、全国の仲間への希望のメッセージとして力強く発信された。

国のすみずみから、こうした人々の日々の暮らしから紡ぎ出される声を、九条をまもろうという大きな流れを、幅広い市民と結び、歌・音楽にして、うたごえを豊かに響かせていきたい。その時、憲法の心は輝き、運動の輪はさらに大きく広がる。うたごえ６０周年をその新たな飛躍をめざす年にしていこうではありませんか。

◆２００８年主な年間活動

①日本のうたごえ祭典 in 東京
　１１月２２日（土）～２４日（月・休）
②合唱発表会
　計画的に早めに準備する。
　合唱発表会は１０月１９日までに終了
③産業別・階層別うたごえ祭典・交流会
　港湾（検討中）
　教育（８月９～１０日・大阪）
　郵便（１０月１２日・愛知）
　医療＆宮城（８月３０～３１日・宮城）
　国鉄（１０月４～５日・大阪）
　保育（１１月１～２日・大阪）
　自治体（９月１４～１５日・兵庫）
　電通（９月２０～２１日・石川）
　私鉄（８月３０日・愛知）
　青年（検討中）
　東北交流会（６月２８～２９日・福島）
　関東・東京交流会（６月７～８日・栃木）
④全国講習会
　全国合唱指導・指揮講習会（６月２０～２２日、長野・松本）
　西日本合唱講習会（５月４日～５日・奈良）
　東日本合唱講習会（４月１９～２０日・東京・調布、府中）
　西日本郷土講習会（５月５～６日、兵庫・加古川）
　東日本郷土講習会（４月２６～２７日・神奈川・三浦）
　第６回全国創作合宿（２月２２～２４日、岡山・倉敷）
⑤３・１ビキニデー（３月１～２日・静岡）
⑥原水爆禁止世界大会（８月４～６日・広島、８～９日・長崎）
⑦第５４回日本母親大会（７月２６～２７日・愛知）
⑧日本平和大会（１１月・予定）
⑨日本高齢者大会（９月８～９日・新潟）